Self-esteem と 両親像

——1. 女子と母親の受容性を軸として——

石 川 嘉 津 子

Self-Esteem and Parent-Child Relationships

ISHIKAWA Katsuko

I. 問　　題

自己概念の重要性は，Snygg & Combs (1949) や Rogers (1951) によって提唱されて以来，特に自己概念と適応性との関係において注目され，多くの研究が行なわれてきた。実証的研究の方法としては，現実自己（自己概念）と理想自己の差異を対象としたものが多く，全般的に差異の小さいものほど適応的であるとされている（斎藤，1959)。しかし，両自己間の差異と内的適応性との関係は，直線的ではなく曲線的であるとの報告もある。また現実自己と理想自己が接近するのは，理想自己の変化によるよりも現実自己の変化によるものであるとの結果が報告されており (Rogers, 1951)，現実自己と理想自己の差異でなくとも，現実自己そのものに対する肯定度が適応の指標になりうると考えられる。

北村 (1977) は“人が自分のあらゆる側面についての経験からしだいに形成した自己の全体像がその人の行動態度を決定的に支配していることは見のがせない事実である。……自己像については，主体的自我によって，つねに一種の自己評価が加えられているのであるが，その全体が肯定的に好ましいものと評価される場合と，否定的に好ましくないものと思われる場合とが区別される”と述べ，後者の著しいものは自己否定的自己嫌悪的となりやすいとしている。Rogers (1951) が“自己概念もしくは自己構造は，意識に上ることを許容することのできる自己についての知覚の体制化された形態である”と述べているように，個人が自己に与える評価は，意識的なものであり個人が自己として認知している側面に限られたものにすぎない。しかし，その部分的評価——特に個人が目を向けやすい側面への評価——の集合が，自己全体を被う肯定的あるいは否定的感情となってその人の行動を規定することになるのである。従って，自己に対する肯定度，価値的評価的感情は個人の自己概念を知る上での重要な手がかりになる。

ところで，Erikson (1959) によれば，安定した自己感情は，社会的に受け容れられ是認されることにより得られるものであり，その根源は早期の母子間の相互的な是認にあるという。この他者から得られた受容や是認により形成された自己感情が，個人にとっての中心的な価値基準となりその個人を規定するのであるならば，そのような感情をもつものとしての自己は，対人関係の中での自己であり，他者の評価を含んだ自己であるといえる。また自己概念の形成において重要な役割を果たす他者とのかかわりは，同時にその個人の自己概念により規定されてゆくものとなる。ここでは，このような他者とのかかわりの中での自己に対する評価的感情 — Self-esteem を自己概念の指標として取りあげてゆく。Self-esteem は，自己評価，自己価値，自尊感情など

と訳されるが，本論では Erikson (1959) に従い，「他者の評価を含んだ自己に対してもつ意識上の価値的な感情であり，対人関係において個人が自分自身を是認する程度のことである」と捉え，自己評価と訳す。一般に自己評価の高い人は積極的に自己を自由に表現し，自己評価の低い人は不安が高く防衛が強いとされる（藤原・前田，1977)。

Sullivan (1953) は，人は絶えず自己評価を下げまいと自身を守っており，それは自己評価の失墜が苦悩すなわち不安を生ぜしめることになるからだと考えた。そして自己評価の失墜は，その人の生活史の中の重要な他者により自己の価値をおとされたためであることに注目し，人間相互関係の過程を強調して，特に家族の重要性を指摘した。また Horney (1939) は，自己評価の低下を意味するといえる自己卑下 (self-minimizing) について述べているが，それは親子関係の障害による基本的不安から生ずるとした。基本的不安のある子供には，客観的事実にかかわりなく世の中は敵意に充ちて見え，自分は孤独で無意味，無力な存在に思えるが，これは幼児期の両親との関係において見返りを求めない愛情，自己確信感が得られなかった結果なのである。Horney, Sullivan, Erikson いずれも自己評価形成過程に母子関係を重視している。そして Rosenberg (1965) と Coopersmith (1967) は質問紙調査により自己評価形成における親子関係の重要性を実証した。Rosenberg は高校生を対象に広範な調査を行ない，一般的な広い社会条件が子供の自己評価とほとんど関連をもたなかったことから，より身近な対人関係における受容と拒否とに焦点を向けるべきであると考えた。そして，両親についての子供の報告によって，親の子供に対する関心の低さと子供の自己評価の低さとの関連を明らかにし，重要な他者にとって自分は大切な存在であるという感情が自己評価を高めるために必要であるとした。その後，Coopersmith は，男子児童とその母親を対象に面接と質問紙調査を実施し，その結果，高い自己評価の先行条件として①両親による子供のほぼ全面的な受容，②明確な制約（子供の世界の構造化)，③一定の制約内での自由の尊重の3つを見出し，子供の自己評価形成には親の養育態度が重要な役割を果たすことを実証した。しかしながら，低い自己評価の子供の母親について，半数あまりが受容的であったり，あるいは，母親自身の自己評価は高かったりなどと，一般傾向に反する例も多く，親の態度に具体的な共通項をあげるまでには至らなかった。

ところで，子供の性格を親の養育態度の類型化から調査した研究では，どのような成果が得られているであろうか。従来の研究をまとめると，親子関係を規定する基本的な次元は，①愛情（受容）――敵意（拒否)，②統制（支配)――自律（服従）の2つである（小嶋，1966)。親子関係を質問紙調査により検討した古典的代表的な Symonds (1939) の研究も，この2次元により親の養育態度を類型化して行なわれた。彼の調査結果では，親の養育態度と子供の性格との間には次のような関係がみられた。

受容――敵意の次元：親から愛され気持ちに疎通性があると，子供は社会的に活動的であり情緒的に安定しているが，親から無視あるいは拒否されている子供は反社会的で情緒不安定である。

支配――服従の次元：親の統制や支配の強い子供は，よりよく社会化され人々に承認されうる行動が多い反面，内気で自分を押える傾向があり，自己表現が困難，劣等感をもちやすい。一方，親から自律性を尊重されている子供は，自主的積極的で自信があり，自己を有効に表現することができる。

Symonds は子供の性格特性として自己評価という概念は用いていないが，自己表現の自由さ

や自信の有無を自己評価の一側面とみなせば，受容的で自律性を尊重する親の子供は自己評価が高くなることになろう。Coopersmith や Symonds の結果から，高い自己評価形成の条件として，親からの受容や気持ちの疎通性および一定枠内での自律性尊重のふたつがあげられる。

さて，親子関係の問題には文化的背景により左右される面も考えられるが，Symonds の研究以来，日本でも親の養育態度と子供の性格行動特性との関係について多くの研究がなされてきた。概して，親が受容的で自律性を尊重する場合，子供は情緒的に安定しており積極的といった性格を示す傾向がみられ，親の養育態度と子供の性格との間の関連が示されている（江川・長嶋，1972；辻岡・山本，1976b）。しかし，傾向の概略を知ることはできても実際の具体的な側面，本質的を部分にはなかなか近づくことができない。これには，①親子関係の複雑さ，問題の多様性閉鎖性から生じる実証的研究のむずかしさ，②全体的平均的傾向の調査になりやすく，具体的動的親子関係の把握に欠ける，③養育態度の類型化や質問紙など測定方法の不整備，④養育態度と不可分なものとして存在するはずの親自身の性格・内面の重要性が充分配慮されていない等の原因がある。1と2は，親子関係を研究対象とすること自体に必然的に生じる問題であり，あらゆる実証的研究に伴う困難性である。3については，主に小嶋（1979）や辻岡・山本（1976a，1976b，1978）によって親子関係把握の方法論が検討され，養育態度測定のより妥当な質問紙が開発されてきている。本調査で用いる子供対象の親子関係診断尺度 EICA は，辻岡・山本（1976b）により分析が繰り返された結果作成されたものである。ところで，親の養育態度測定においては，親と子あるいは第三者（観察者）とでその認知にずれのあることが問題となる。しかし客観的事実よりも子供が認知している親の態度が子供にとっての現実であり，それによって子供の行動が規定されることを考えると，その子供特有の認知傾向による歪が生じうることを踏えた上では，子供の認知を親の養育態度類型化の基準にすることが適当であろう。さて，4は，小嶋（1979）によってもその問題点が指摘されているところのものである。すなわち，親の子供に対する態度だけでなく，親子関係という対人状況下に置かれた親個人の内面的要因，親自身の自己に対する態度が子供の性格形成上積極的な意味をもつはずであるが，従来の調査研究においては実施上の困難も手伝ってこの視点からのアプローチが欠けていた。親の養育態度として，単に直接的表層的な躾行動の側面だけが子供へと伝えられるわけでなく，親自身は別にはたらきかけているつもりなどないような部分も，実際には子供へと伝わり大きな影響力をもつ。例えば，言語水準とその背後にある非言語水準の伝達内容とに矛盾があると，子供自身よくわからないままその二重拘束をうけて混乱する。従って，表層的ないわゆる養育態度と同時に，親自身の性格形成そのものを問いなおす必要がある。これまでは子供に対する養育態度と個人としての親の内面的要因（例えば自己評価）とが別々に取りあげられていた。親の，子供に対する態度だけでなく，自分自身に対してもつ態度をも併せて子供の性格との関わりを調査した研究は，臨床場面以外ではなされなかったのである。従って，子供の性格形成について，親の養育態度と内面的要因との相互的な関連性を検討することが問題として残されている。

Ⅱ．目　　的

自己評価の形成を，親子関係において捉え両親の自己評価ならびに養育態度（今回は特に情緒的支持，不支持に関して）の両面から調査検討する。

Ⅲ. 方　　法

1. 被験者　共学高校女子生徒131名と女子高校生徒80名，計211名中，両親共に健在で対応する父母子三者から完答を得られた150組の結果を分析の対象とした。年齢範囲は，父：39—62歳，母：38—59歳，子：16—18歳。

2. 質問紙　(1)自己評価の測定　Janis & Field (1959) による Feeling of Inadequacy の23項目を遠藤他 (1974) が邦訳した SE スケール（表1）。理論上の得点範囲は23—115点であり，得点が高いほど自己評価が高くなる。(2)養育態度の測定　辻岡・山本 (1976b) により作成され

表1　SE スケールの項目番号と内容（遠藤他，1974）

1. あなたが知っている大部分の人々に比べて自分の方が劣っていると感じるようなことはありますか。
※2. あなたは，自分が価値ある人間であると感じていますか。
※3. あなたは，自分の知っている人々が，いつかはあなたを尊敬の目をもって仰ぎみる日がくると確信していますか。
※4. あなたは，自分の過誤（ミス）は自分のせいだと感じることが，どのくらいありますか。
5. あなたは，自分について落胆するあまり，何が一体価値あるものだろうと疑いをおぼえることがありますか。
6. あなたは，自己嫌悪をおぼえること（自分で自分がいやになること）がありますか。
7. 一般に，あなたは自分のいろいろの能力についてどのくらい自信をもっていますか。
8. あなたは，自分にはうまくやれることなど全然ないといった気持になることがどのくらいありますか。
9. あなたは，自分が他の人々とどのくらいうまくやってゆけるかということについて気にしますか。
10. あなたは，あなたの仕事ぶりや成績を審査する立場にある人の批評をどのくらい気にしますか。
11. あなたは，他の人々がすでに集まって話し合っている部屋に自分一人ではいっていくような場合，気兼ねや不安をおぼえますか。
12. あなたは，人前を気にしたり，はにかみをおぼえることがありますか。
13. あなたは，クラスや自分の同年輩の人々のグループの前でしゃべらなければならないとき，心配したり，不安に思ったりしますか。
14. 他の人々がみているところで，ゲームやスポーツをやっており，それにぜひ勝とうと思っている場合，あなたはふつうどのくらいとり乱したり，まごついたり（あがったり）しますか。
15. 他の人々から，あなたが職業や経歴における成功者（または優等生）とみられているか，あるいは失敗者（または劣等生）とみられているかということについて，あなたは気になりますか。
16. 人といっしょにいるとき，あなたはどんなことを話題にしたらよいかについて，困りますか。
17. とんでもないミスやばかにされるような大失敗をしでかしたとき，あなたはどの位長くそのことを気にしますか。
18. あなたは，初対面の人に会ったとき，時間つぶしに話をするのがむずかしいですか。
19. 他の人があなたと一緒にいることを好んでいるかどうかについて，あなたは気しにますか。
20. あなたは，恥ずかしくてどうにもならないと思うことがありますか。
21. 自分の意見に同意しない人々を説得している場合，あなたは自分が相手にどのような印象を与えているかということが気になりますか。
22. あなたの友達や知りあいのなかにあなたのことをよく思っていない人がいるかもしれないと考えるとき，あなたはそのことをどのくらい気にしますか。
23. 他の人があなたのことをどのように考えているかということが，あなたはどのくらい気になりますか。

注）各項目は「非常に（しばしば）……である（……する）」から「ほとんど……でない（……しない）」までの5段階評定で，各々に1～5点が与えられる。2・3・7は逆転項目。※は除外された項目である。

表2　EICA—情緒的支持（Es）の項目

私の言うことに耳を傾けてくれる
いっしょにいると気持が楽になる
私が困っているときには元気づけてくれる
私のなやみや心配事を理解してくれる
いつも私の考えや意見に耳を傾けてくれる
私には友達がとても大事だということを理解してくれる
私がどんな物の見方をしているのか理解しようとする
私といっしょに仕事をするときは私の意見を聞いてくれる
心配事をじっくり聞いてくれるので気持が楽になる
私が喜ぶ本や雑誌を買ってくれたり学校で役立つことを教えてくれたりする

注）各項目は「はい」「？」「いいえ」の3件法で各々に0～2点が与えられる

た親子関係診断尺度 EICA。この中の情緒的支持（以下 Es と略す）の項目を用いた（表2）。Es 尺度は，親が子供を愛し気持ちの上で支持する，承認し受容する傾向であり，父母別に子供の認知により測定される。1尺度につき10項目あり，Es 尺度の理論上の得点範囲は0—20点で，得点が高いほど子供が親から情緒的に支持されているとみていることになる。

3. 手続き　調査は父母子で一組となるように番号を付し，無記名とした。生徒には集団式で EICA，SE スケールの順に実施。両親には生徒を通し，説明をつけて配付した。

4. 資料の整理　(1) SE スケールの項目分析　父母子別に上位下位分析を行ない，分母子共通して x^2 値に1％水準で有意差の認められた20項目を採用し（表1），これらの合計得点を自己評価得点（Se 得点と略す）とした。20項目の内的整合性信頼性係数[注1)]は，父：$\gamma_{xx}=0.89$，母：$\gamma_{xx}=0.91$，子：$\gamma_{xx}=0.91$ であり，また Se 得点の分布の正規性が確認された。(2) Se 得点と Es 得点による群構成　統計的処理において，尺度得点により，上位群（上から 1/3）と下位群（下から 1/3）に分ける場合の基準を表3に，また本文に用いた略号の説明を表4に示す。

表3　尺度得点による群分けと各群の平均，標準偏差

尺度-群	(n)	得点範囲	$\overline{X}$	SD	尺度-群	(n)	得点範囲	$\overline{X}$	SD
F・Se-L	(50)	47–66	59.7	5.30	M・Se-L	(51)	36–62	54.7	6.99
-H	(53)	74–100	81.5	6.48	-H	(50)	71–93	77.8	6.24
F・Es-L	(46)	0–8	5.0	2.70	M・Es-L	(52)	0–13	8.4	3.47
-H	(54)	14–20	16.4	1.86	-H	(45)	18–20	18.6	0.83

注）L＝下位群，H＝上位群

表4　略号の説明

F・□……父親に関する尺度得点	□に入る尺度名
M・□……母親に関する尺度得点	Se……自己評価（父母子各々本人による評定）
C・□……子供に関する尺度得点	Es……情緒的支持（子供による評定）

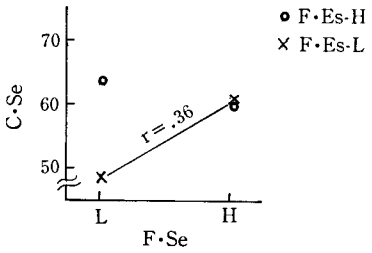
ex. F・Se-H……父親の自己評価得点—上位群

Ⅳ. 結　　果

1. 両親像と子供の自己評価　両親の自己評価と養育態度（情緒的支持，不支持）とが，どのよ

a)

	F・Se-L	−H
−H	62.6 13.05 (17)	60.2 13.86 (18)
F・Se-L	48.0 14.27 (11)	60.8 13.56 (19)



b)

	M・Se-L	−H
−H	56.5 14.07 (18)	70.4 11.49 (14)
M・Es-L	55.7 10.58 (14)	56.2 12.47 (20)

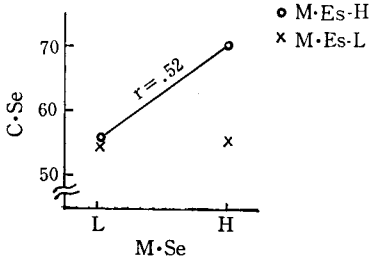


図1　4群別 C・Se（左側）および情緒的支持・不支持別，親の Se の高低における C・Se 得点プロフィール（右側）

注）左側 Cell 内の数値は上から $\overline{X}$，SD.（n）；右側座標において直線で結んである群は，その親の Se と C・Se との相関係数（直線上の数値）が，5％水準で有意であったことを示す（表5参照）。

うに相互に作用しあって子供の自己評価に関わっているかを調べた。両親の Se 上下2群と Es 尺度の上下2群の組合せによってできた4群において，C・Se（子供の自己評価得点）の二要因分散分析を行なった。その結果，F・Se×F・Es，M・Se×M・Es いずれにおいても5％水準で交互作用に有意差が認められた。この2組における4群の C・Se の平均と標準偏差および4群のプロフィールを図1に示す。すなわち，(a)父親に関しては情緒的支持あるいは父親の自己評価のいずれかが高ければ子供の自己評価は高くなった。（情緒的不支持かつ父親の自己評価が低い場合にのみ，子供の自己評価は低くなった。）一方(b)母親に関しては情緒的支持であっても，その母親の自己評価が低ければ子供の自己評価も低くなり，情緒的支持かつ母親の自己評価が高い場合にのみ，子供の自己評価は高くなった。（情緒的不支持であれば母親の自己評価の高低にかかわらず，また，母親の自己評価が低ければ情緒的支持不支持にかかわらず，子供の自己評価は低くなった。）

2. 情緒的支持と不支持各々における両親と子供の自己評価得点の相関　Es 尺度の上下2群において親の Se と C・Se の相関係数を求めた結果（表5），M・Es-H群でかなり高い正の相関を

表5　Es 尺度，上下2群別の両親の Se と C・Se の相関係数（Spearman）

尺度一群	(n)	F・Se×C・Se γ_s	尺度一群	(n)	M・Se×C・Se γ_s
F・Es-L	(46)	.32 *	M・Es-L	(52)	−.04
-H	(54)	−.10	-H	(45)	.51 ***

*P<.05　***P<.001

示し（P<.001），F・Es-L 群では低いが有意な正の相関を示した（P<.05）。また Es 尺度上下2群の相関係数の差を検定したところ，F・Es，M・Es ともにL群とH群とで親の Se と C・Se の相関の強さに有意差が認められた[注2)]。すなわち，親の養育態度を子供がどのように見ているかによって，親と子供の自己評価得点の相関の強さは異なった。特に子供が，母親から情緒的に支持されていると認知している場合に，母親と子供の相関が強かった。

3. 両親の自己評価と子供に認知された養育態度との関連性　Es 尺度上下2群において，親の Se の平均を求めて群間差の t 検定を行なったが，いずれの2群間にも有意差はなかった（表6）。すなわち，親の自己評価の高低と，子供の認知による親の情緒的支持不支持との間に関連はみられなかった。

表6　Es 上下2群の親の Se 平均得点と標準偏差および2群間差の t 検定

	F・Se			LH間の t 検定		M・Se			LH間の t 検定
	$\bar{X}$	SD	(n)	t		$\bar{X}$	SD	(n)	t
F・Es-L	72.2	11.27	(46)	1.00 n.s.	M・Es-L	67.8	10.81	(52)	0.64 n.s.
-H	70.6	9.57	(54)		-H	66.4	10.25	(45)	

V. 考　　察

1. 子供の自己評価と両親像　親の養育態度ならびに自己評価が子供に及ぼす影響には交互作用が認められ，各々別個に取り上げたのでは不充分であった。親の情緒的支持不支持と自己評価とは，相互に作用しあって子供の自己評価に影響を与えるものであり，かつ，父親と母親でそれらの関与の様相が違ってくることが本結果において明らかにされたのである。両親像としては，養育態度と自己評価との2要因を組合せ類型として同時に検討することが必要といえる。今回の調査で対象とされた子供は女子のみであるが，従来の報告の不明な点を多少とも補える結果の得られたことは興味深く，より具体的な親子関係把握の方向へと少し近づけたのではないかと思われる。問題のところで取り上げたように，Coopersmith (1967) は自己評価についての研究で，親子関係における一般傾向は一応見出したものの，その図式にそわない例がかなりみられたと述べている。しかしこの例外も，養育態度と親自身の自己評価とを組合せて考えるならば理解できるように思われる。母親が受容的あるいは自己評価が高いにもかかわらず子供の自己評価が低かった中には，その母親に受容性か高い自己評価かのいずれか片方が欠けていたということで説明できる例が含まれていたのではないだろうか。また Coopersmith が対象としたのは男子児童と母親であったため，同性である父親の方の要因も多分にあって例外が多く出たのかもしれない。

2. 女子にとっての父親と母親　さて，父親ではその自己評価が高いかあるいは子供を情緒的に支持しているか，いずれか一方の条件さえ充たしていれば女子の自己評価は保たれたが，しかし，母親ではその内ひとつでも条件が欠ければ，女子の自己評価は低下した。また，自己評価における親と子との相関をみても，父親とよりも母親との方が強く，女子の自己評価にとっては，父親に比べて母親の内的要因がはるかに重要となることが示されている。辻岡・山本（1975）は，親子関係診断尺度作成過程において父親と女子および母親と女子とでは因子間の相関係数が異なる結果を得，このことについて，父親は女子にとっては情緒的に母親よりも独立的な存在で，母親

は同性としての結合関係にあるからであろうと述べている。乳児は母子一体感の中にあって全面的に母親に依存しているため，男女児いずれにとっても母親が非常に重要な存在になっている。しかし幼児期以降になると，母親は女子にとって同一視の対象として特別に意味のある存在にかわってくる。一般に子供は同性の親をモデルとして性役割を取得し，これが自己概念（ここでは自己評価）の主な構成要因のひとつになっていくからである。自己評価について，母親との間に父親に比べてより密接な関係が認められたのは，本研究の対象が女子であり，同一視が母親に向かいやすかったこともあろう。また，男女によって同一視の対象が異なるということの他に，家庭における父親と母親の役割の違いも影響すると考えられる。家族の機能は，家族構成員相互の関係といった側面と，家族全体と外部社会との関係といった側面とに大別される。Parsons は社会学の立場から父母の役割分化を論じ，父親は主として組織体としての家族維持のために家族と家族の外部との関係を調整する機能（道具的役割）を受け持ち，母親は主として家族の内部的な事柄，家族の結合の維持や感情問題を調整する機能（表出的役割）を受け持つものとしている（辻，1970）。このような役割分化は相対的なものであり，確定的なものではないが，一般にはこれに準じた形がとられている。従って子供は，母親とは直接的な接触をもつが，父親とは間接的な関係となり，母親を通しての接触になりやすい。このことも親子関係における父親と母親の影響度に大きな違いを招くことになろう。この点男子は，乳幼児期に直接接触をもつのは母親，同一視の対象は父親となり，両方とも母親が重要な位置を占める女子とは，また異なった様相を示すのではないかと思われる。同性の親との同一視，あるいは父母の役割の違いによる影響を明らかにするためには，今後，男子をも含めた調査の実施が望まれる。

3. 女子の自己評価と母親の自己評価ならびに養育態度　子供が母親から情緒的に支持されている場合には，母子の自己評価の間にかなり強い正の相関が認められた。そして，母親が情緒的不支持の場合は，母親の自己評価の如何にかかわらず子供の自己評価は低かった。母子の自己評価が密接な関連性を示す前提として，子供に対する母親の情緒的支持が大事な役割を果たしているといえる。

幼児は，母親が自らにとって重要な存在であることを知るほど母親の行動様式や価値基準を自己の内に取り入れようとし，この母親との同一視が母親との感情世界に共棲するための前提となる。同一視は，親が愛情深く養護的であるほど大きく，模倣行動も成立しやすくなるということが Sears, R. R. et al. (1957) 他によって示されている。また個人の自己概念は，知覚，認知，価値の学習された総体であり，その主要な部分は個人が他者から受ける反応，特にその評価に基づき内的に構成されたものである（北村，1977）。そこで母親が子供の気持ちを理解し支えとなるほど，子供にとって母親の存在は他者の中でも特に重要な存在となり，母親の自己評価が子供自身の内的価値値基準としてとりいれられやすくなる。それが自己の行動や評価の体系として成立し，子供自身の自己評価の基底になると考えられる。特に母親が情緒的支持の場合に限り，母子間の自己評価の相関が強くなったのもこの理由によろう。

4. 個人としての母親について　ところで，Erikson (1959) は，自己評価の源は最初の自己是認すなわち母子間の早期の相互的是認に求められるとしているが，母子未分化な乳児期における相互的是認とは，ほとんど母親自身の自己是認と変わりないように思われる。そこでは，母親の，子供に向けられた愛情，是認と同時に，母親自身に向けられた是認，ある程度以上の自己評価が

必要となる。実際本研究においても，母親の自己評価が低いと，子供を情緒的に支持している場合ですら，その子の自己評価は低かった。このようなとき，子供の気持ちとしては（意識），確かにわかってもらえていると思ってはいても，どこかに不安が潜んでいるわけである。他者といる場において自分の存在を是認できない，恥じているともいえる自己評価の低い人が子供の気持ちを支持したとしても，それは常に自分には存在価値がないというところの同じ地盤で共鳴していることになる。子供の気持ちをわかってやれても，自身の自己評価が低い母親は，子供に対して消極的な受けとめに留まり，積極的な関心，可能性に向けての信頼には欠けるのかもしれない。こうして子供が得た心の安らぎは，母といる間のほんのその場凌ぎのものにすぎず，一歩外へ出ればもう通用しなくなるもののように思われる。基本的な安心感は得られていないのである。人前に出たときの自信のなさ，不安や困惑，自分の存在を恥じるといったことが自己評価の低さの中でも特に主だった状態といえるが，恥に関して土居（1971）は，“恥の感覚の方は，自分自身の存在そのものが不完全で不足していると感ずるのであるから，より根元的である。恥じる者は，周囲に暖かく包まれたいと願いながら，その甘えが満たされない状態で，衆人環視の場に身をさらす思いに悩まねばならないのである”と述べている。またその際，神学者ボンヘッファーの次のような言葉をあげている，“恥は人間が根元から離れていることについての口にいい尽せない想起である。それはこの隔離に対する悲しみであり，根元との一致に戻りたいという無力の願望である。……恥は自責よりもっと根元的なのである”。自己評価が低いということは，その母親自体が根元から隔離されているのである。自身の存在さえ認められないものが他者の存在そのものを是認できるはずはない。このように見ていくと子供の問題はそれ自体ストレートに親自身の抱える問題に重なってくる。子供の問題はしばしば，実際は親自身の問題の代替物である。親は子供の問題で頭をかかえているつもりでも，本当は自分自身の問題として悩むはずのものであったりする。あるいは実際，心の中では私自身が助けてほしいと叫んでいたりするはずである。意識せずしてなされた子供から親ないしは家への問題提起，あるいはひとりの人間としての親へと与えられたやり直しの機会ともなりうる。治療場面において，母親面接が子供のものと並行してなされていても，親の方には焦点がつきにくいということもあるが，どうしても中心は子供に置かれがちである。そして親は暖かく包まれる代わりに気をつけるべき点を教えられる。治療者の方も，母親担当者も決してそんなつもりはないのだが，やはりそういうふうになってしまっていることの方が実際には多いように感じられる。女子は特に，いずれ今度は自分が母親となる。低い自己評価をかかえて母になれば，理解し支えたとしてもその子供はまた自身を不完全な存在として恥じることになるかもしれない。母になっても，抱えている問題は同じである。親の場合，既に人格もほぼ固まってしまっているだけにその対応は難しいが，常に考え続けていかなければならない事柄である。

5. 親の自己評価と養育態度について　親の自己評価と養育態度を取り上げる場合，前者が後者に関与していると考えられるが，本調査では親の自己評価と子供の認知による親の養育態度との間に関連性はみられなかった。従って，子供の自己評価を問題とするときに，親側の要因として，顕在的な躾，養育態度とは次元の異なるものとして，個人としての親の内的要因についても検討されることはより大切なこととなる。

さて，ここで親の養育態度測定上の問題点についても考えておく必要があろう。養育態度に関

しては，親が自分の親としての立場を意識して子供に対する態度を制約している場合など，たとえそれが内から出てくるものであっても，直接的な躾や表面的な養育態度といった行動次元は防衛がはたらいて変型されている可能性がある。また，子供がその認知傾向（それ自体親からうけている影響大にしても）によって，親の養育態度を歪曲して評価していることも考えられる。このような点について，態度の意識的な部分と無意識的な部分とへの考慮の他，子供の認知による養育態度以外に，親自身の認知による養育態度を調査し，両者のずれを分析することも有効と思われる。このずれには，子供の認知傾向に基づく歪みだけでなく，親自身の内的要因による部分も含まれるため，子供の自己評価形成因のみでなく，親自身の自己評価に顕われた問題性をも同じ親子関係という基盤の上で考えていくことができるのではないだろうか。

注

注1） Kuder-Richardson の公式

$$\gamma_{xx}=\left(\frac{k}{k-1}\right)\left(1-\frac{\sum_{j=1}^{k} S_j^2}{Sx^2}\right)$$

Si^2＝項目 j の不偏分散

Sx^2＝質問紙全体（合計得点）の不偏分散

k＝質問紙の項目数

なお SE スケールの尺度は間隔尺度として扱われた。

注2） F・Es：CR＝2.71（P<.01）

M・Es：CR＝2.62（P<.01）

$$CR=\frac{Z_1'-Z_2'}{\sqrt{\frac{1}{n_1-3}+\frac{1}{n_2-3}}}$$

Z'＝Fisher の Z' 変換値（$\gamma\rightarrow Z'$）

n_1，n_2＝2つの相関の標本の大きさ

文　献

Berger, E. M. 1952 The relation between expressed acceptance of self and expressed acceptance of others. The Journal of abnormal and Social Psychology, 47, 778–782.

Coopersmith, S. 1967 The antecedents of self-esteem. San Francisco: Freeman.

土居健郎 1971「甘え」の構造 弘文堂

江川玟成・長島貞夫 1972 親の養育態度と子どもの性格特性との関係の検討 教育相談研究（東京教育大学教育相談研究所），12，65–75.

遠藤辰雄・安藤延男・冷川昭子・井上祥治 1974 Self-Esteem の研究 九州大学教育学部紀要（教育心理学部門），18(2)，53–65.

Erikson, E. H. (1959) 小此木啓吾（訳編） 1973 自我同一性 誠信書房

Horney, K. (1939) 安田一郎（訳） 精神分析の新しい道 ホーナイ全集第3巻 誠信書房

北村晴郎 1977 自我の心理 新版 誠信書房

小嶋秀夫 1979 親子関係の心理 児童心理，33，938–955，1126–1143.

Medinnus, G. R., & Curtis, F. J. 1963 The relation between maternal self-acceptance and child acceptance. Journal of Consulting Psychology, 27, 542–544.

Rogers, C. R. (1951) 友田不二男（編訳） 1966 サイコセラピィ ロージァズ全集第3巻 岩崎学術出版社

Rosenberg, M. 1965 Society and the adolescent self-image. Princeton: Princeton Univ. Press.

斎藤久美子　1959　自己意識の分析による人格適応性の一研究　心理学研究，30，277–285.
Sears, R.R., Mccoby, E.E. & Levin, H.　1957　Patterns of child rearing. New York: Harper.
Snygg, D., & Combs, A.W.　1949　Individual behavior. New York: Harper.
Sullivan, H.S.　1953　Ineer personal theory of psyahiatry. New York: Norton.
Symonds, P. M. 1939　The psychology of parent-child relationships. New York: Appleton-Century.
辻岡美延・山本吉廣　1975　斜交軸回転による因子構造の交叉妥当化　関西大学社会学部紀要，6（1），53–66.
辻岡美延・山本吉廣　1976a　親子関係診断尺度 EICA の作成　関西大学社会学部紀要，7（2），1–14.
辻岡美延・山本吉廣　1976b　親子関係診断尺度 EICA および同実施手引　日本心理テスト研究所
辻岡美延・山本吉廣　1978　親子関係の類型　教育心理学研究，26，84–93.

（博士後期課程）